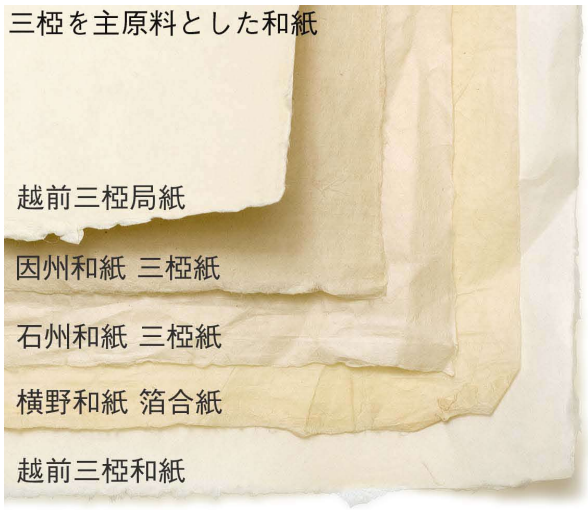
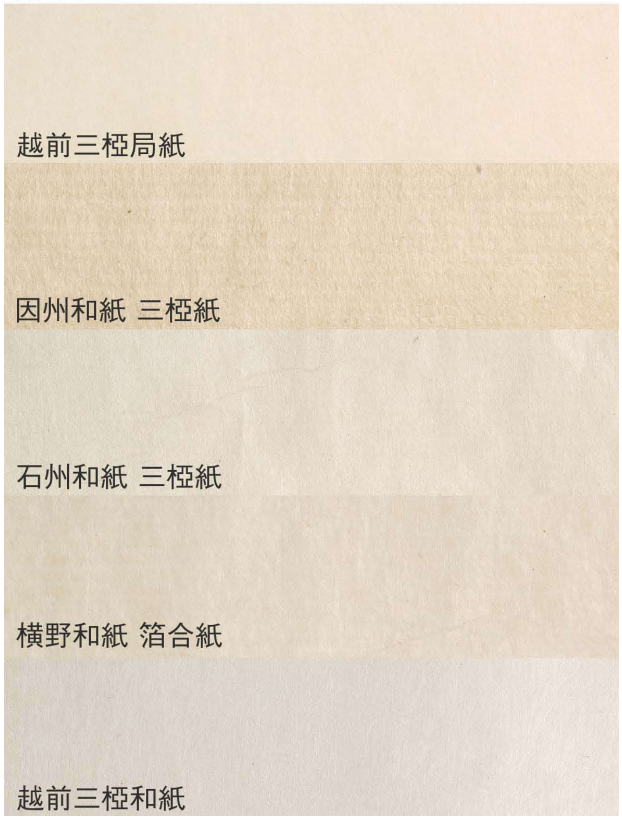
和紙

わし



拡大写真



※写真中の紙色は、実際とは異なる場合があります。

概要

和紙は、日本で古くから各分野で利用され、生活の中ではなくてはならない紙で、独自の原料・製法により発展してきた紙の総称です。現在も日本各地で様々な種類の和紙が手漉きにより生産され、日本画や版画、デザインなどの造形素材としてや、障子や襖などの生活用品まで幅広く利用されています。

和紙は、主に楮（こうぞ）・三椏（みつまた）・雁皮（がんぴ）の樹皮､長くしなやかな靱皮繊維（じんぴせんい）を原料としています。主な製造工程としては、原料を蒸して樹皮を剥ぎ、水に晒して煮た後、繊維を叩解（こうかい）して細かくほぐしていきます。こうしてできた紙料（しりょう）と、黄蜀葵（とろろあおい）の根などから抽出した粘液「ねり」を水の中で混合します。「ねり」は紙料が水中で固まらず程良く分散させる役割をし、その水を漉き桁（すきけた）と呼ばれる道具ですくい上げ、前後（美濃紙は前後左右）に揺らしながら紙を漉き上げます。この方法は日本独自の製法として「流し漉き」と呼ばれます。漉いた紙は水分を含んでいるため、木板に張り付け自然乾燥させた後、完成します。和紙が強く美しく仕上がる理由には、「ねり」と「流し漉き」の開発、特に漉き手の技術が優先され、繊維が均一にしっかりと絡み合った紙の構造になります。

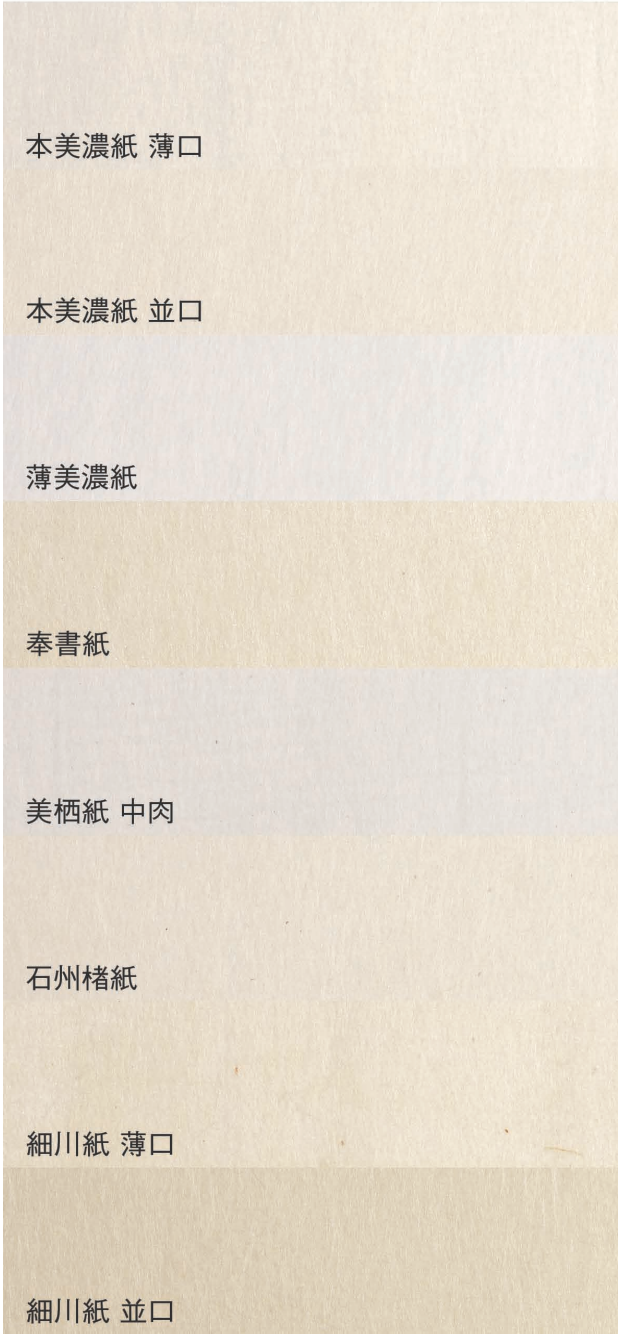
後漢時代（105年）の中国で、蔡倫（さいりん）が手漉きによる製紙法を大成し、その後、中央アジアや中東を経てヨーロッパへ伝播した一方、朝鮮半島を経て飛鳥時代に日本へ伝わったものが和紙のルーツとなります。現存する最古の和紙は、正倉院に保管されている戸籍を書き記した帳簿に用いられた紙で､約1300年前の702年（大宝２年）大宝律令が施行された頃のものと言われています。大量生産される洋紙に比べ、手漉きの和紙は生産量に限界がありますが、その耐久性や保存性は、他に類を見ません。ちなみに、和紙という名称は、明治時代に日本に輸入された紙を「洋紙」と呼んだことに対し、古来から伝わる国産紙の名称として付けられました。

造形分野での主な和紙の利用法は、日本画制作の支持体やその補強のための裏打ち用紙、版画の刷りに用いる紙や作品の保存用紙、デザインの分野では、照明やインテ

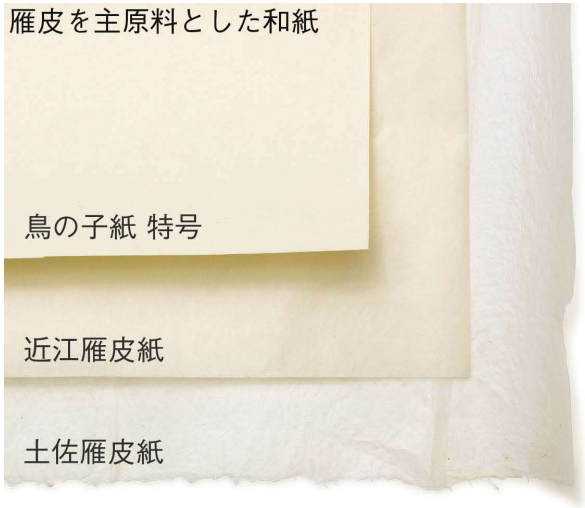
Copyright © 2007-2009 Musashino Art University. All Rights Reserved.

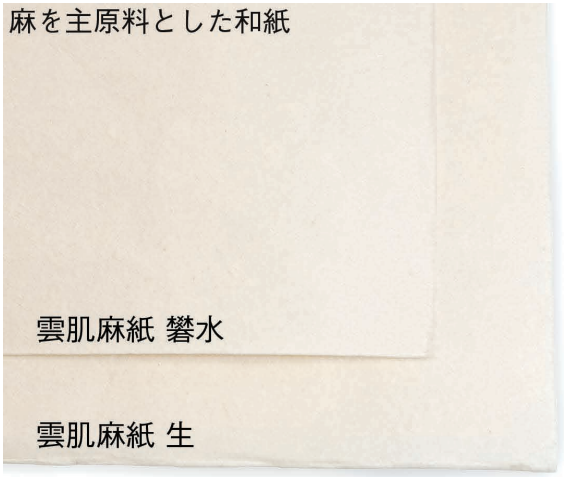
リア、書物の装丁、ファッションなど様々な物の材料となり、その他に書や表具、絵画修復などにも利用されるなど、造形表現と密接に関わった素材となっています。和紙は、和紙専門店や画材店などで購入できます。

拡大写真

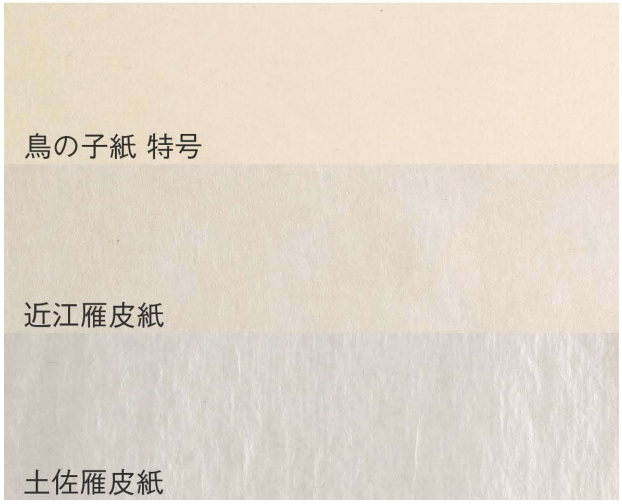


Copyright © 2007-2009 Musashino Art University. All Rights Reserved.

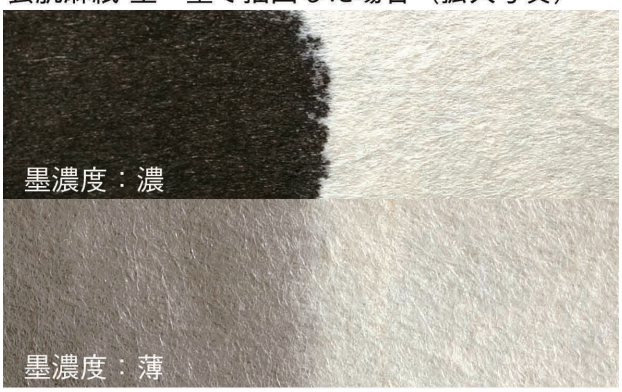




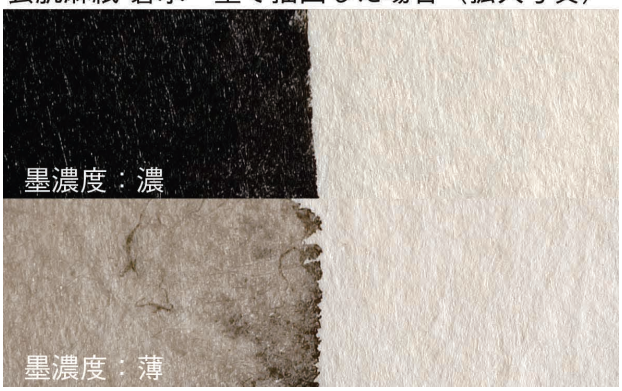
拡大写真



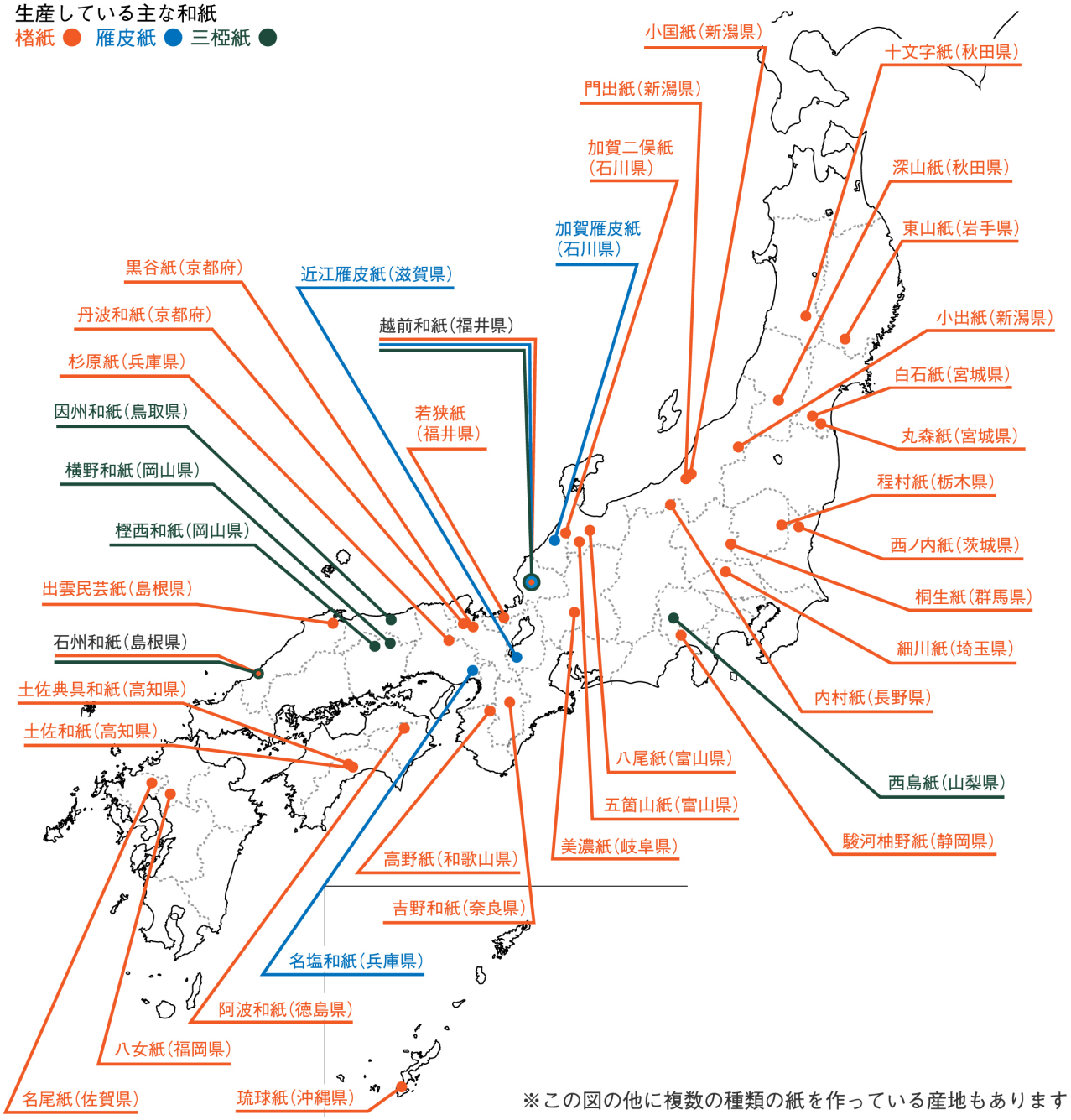
雲肌麻紙 生　墨で描画した場合（拡大写真）



雲肌麻紙 礬水　墨で描画した場合（拡大写真）



Copyright © 2007-2009 Musashino Art University. All Rights Reserved.



Copyright © 2007-2009 Musashino Art University. All Rights Reserved.